

前回までのあらすじ

テストラシアを狙う妖精の女王ニリッサはハイダンヴュの息子を誘拐し、彼をフォーカスとして Steal Land の儀式を行おうとしていた。王宮メンバーは儀式の最初の効果である First Bloom を退け、逆にニリッサの本拠地である Thousandbreaths に突入、ガーディアンなどを蹴散らし、彼女の腹心である Wriggiring Man をスカウトしてきた。

Wriggiring Man から教わったカウンター儀式を国民達と夢の力を借りて成功させたハイダンヴュ達だったが、目が覚めてみると、テストラシア城があったところにニリッサの居城、House at the Edge of Time が。

Material Plane に引きずり出された女王とその配下は弱っている。女王が破れかぶれになって息子に何かをする前に、助け出さなければならない。

戦の始まり

ハイダンヴュ達は身支度を調べ、かけられるだけの呪文をかけて城の前にいた。この先にはリノーム、ジャバーウォッキーなど多数の魔物が待ち受けているのだ。

リノームのいる橋に向かって歩き出したとき、アーチャー、イングリッド、そしてバスケット王が姿を現した。

「旦那、ここは俺たちに任せて、早くニリシアの所へ」

「お前には負けるが、わしもまだまだ現役、こんなは虫類など敵ではないわ」

「あの竜は遠隔攻撃手段が乏しいので、Archer と私がいれば何とかあります」

「...判った、頼んだぞ、アーチャー」

バスケット王のコメントにはどう突っ込んだら良いのだろうと考えつつも、確かにアーチャーとイングリッドなら問題は無かろうと、リノームをスルーして駆け出すヴュ王達。そこに、橋の向こうから半透明のエルフのような戦士の一群が鬨の声を上げながら突撃してくる。

すると、王達の後ろからも人々の鬨の音がする。フラッセ、ケステンそして Hamanu の父に導かれたクリスタルナイツにテストラシア軍団だ。

「隊長、こいつらは我々にお任せ下さい」

「くう、バーンホールドで隠居というわけにはいかないもんだぜ」

「Hamanu、あの悲しい王女を止めてやってくれ」

「敵は Ghost のようだ、気をつけてくれ」

「大丈夫、クリスタルナイツは Mind-affect が Immune だから！」

幽霊達を皆に任せ、中庭に入ると、上から声がする。

「この先に進むとあらば、私の喰らいつく顎、引き掴む鉤爪に用心することだ」

「また Jubjub 鳥と」

「燻り狂うバンダースナッチにも」

そして、館の屋根から前回倒したはずのジャバーウォッキー、ドードーのような鳥、そして狼の巨大な化け物が姿を現した。

ここで姿を現したのは亡国の4騎士だった。

「ジャバウォッキーは我らに任されよ」「竜と戦うは騎士の誉れ」「倒したら直ぐに後を追う」「だが間に合わなかったときには、我が王を頼みましたぞ」

こう言って彼等は、空中でジャバーウォッキーと戦い始める。

一方、狼のようなバンダースナッチはエステルを睨み据えていった。

「貴様が、東西南北の風を倒し、あのにつくきレンジャーの力を継いだものは」

「いえ、風はダリーに受け継いだんですが」

「そうか、だが裏の風たる私が人間ごときに滅ぼせると思うな！」

「...」

こう言って突進してきたバンダースナッチは hp4 倍テンプレートにより 1424 点もの hp を誇り、swift での追加攻撃やエリアアタック、confuse のゲイズまで持った化け物。これにおまけのようにくっついているジャブジャブ鳥も、攻撃力は無くとも 60ft 以内の全員を stun させる鳴き声の持ち主。

が、バンダースナッチはそれほど AC が高くなく、resist も持たないため、爆弾連打とグレイブ(クリティカルもあった)によってついにその巨体を横たえたのだった。

まだジャバーウォッキーと戦っている騎士達を残し、ヴュ王達は館の中に入る。

恐怖の AoO 祭り

城の中に入ると、Wriggiring Man からの Telepathic Bond で連絡が入る。

「首尾良く館の中に入ったようだな。ここからは私のナビゲーションに従って進めば最短でニリッサの元までたどり着ける」

Wriggiring Man の指示に従い、目の前の扉開けると、部屋の隅の影から大きな影が飛び出してきた。これは妖精のアサシン、Ankou！だが、その Ankou からさらに別の影が飛び出したかと思うと大きな口を開けて Ankou を飲み込み、消え去った。そして暗がりから出てきたのは銀髪の美人エルフ、すなわちヴェテンスキャップのおばあちゃん。

「影の魔法は私の分野。こいつらは私一人で問題ない。ヴェテンスキャップ、しっかりね」

そう言ってわき出る Ankou を始末していくメティシエにその場を任せ、さらに奥へと進む。

その先にあったのは、大きな玉座のあるホール。だが、玉座には誰もいない。

「ニリッサは玉座にはいない。奴は Fable と呼ばれる自分で作った特殊な空間に引きこもっているんだ。さあ、そこから二階へ」Wriggiring Man の指示に従ってホールを後にしようとする、吹き抜けになっているホールの上から巨大な羽の生えた化け物が振ってくる。身構えたハイダンヴュ達だったが、化け物の上から大量の小瓶が振ってきて、大爆発を起こした。

爆炎の中空中に姿を現したのは、真っ白な髪となったネリサヴィアルだった。

「Bleaching になってしまった私は格好の実験材料だからね、そうそう死ねはせん。私のラボと大学もバカ弟子にはわたさんぞ！」

そう言って、彼女は次々と爆弾を投げつける。これはこれで、手伝ってくれているということのようで、何か言いたそうなエステルを引きずって、先を急ぐ一行だった。

階段を上がった先も大きなホールで、そこには 6 匹のワイヴァーンが待ち構えていた。大きなワイヴァーンの割れた舌は異様に長く、どうやらこれで相手を捕まえて引っ張る生き物のようだ。ここには助けてくれる仲間はおらず、仕方なく相手をすることに。が、この生き物は相手を捕まえて pull し、その移動により大量の AoO を引き起こす汚い AoO 祭り生物だった。しかも舌の Reach は 30ft。狭い部屋の中では、どこにいても引きずられる。

最初、敵に引きずり回され、一時は王様も気絶する事態となったが、ヴェテンスキャップの範囲 staggered 呪文で移動を封じられ、一匹ずつ仕留められていった。とはいえ、味方も Heal 呪文等のリソースを大きくはがれてしまった。

墮騎士の最後

ワイヴァーンを倒し、先を進んだ一行の耳に世にも恐ろしく、悲しげな声が聞こえてくる。これは 6 人の Nymph の化け物による精神攻撃で、パーティー全員が Will を落とし、Panicked になってしまう。そして姿を現したのは、目から血の涙を流す無表情なニフの群れ。

しかし、そこにむかって半透明なアゲハチョウの奔流が。蝶々に邪魔をされ、Nymph 達の叫び声が効力を失う。正気を取り戻したハイダンヴュの耳に、リリーの声だけが聞こえた。

「ハイダンヴュ殿、これは貸しにしておきましょう。さ、早く先へ...」

さらに階段をのぼると、そこは建物の中ながら、廃墟のように壁が壊れ、雑草が多い茂った場所だった。おまけに、細い道が迷路のようになっている。通路を先に進もうとすると、道の奥の方から不思議な音楽が聞こえてきた。その蛇笛のような音楽を聴いていると、足が勝手に踊り出してしまふ。これはまずいと多くに進もうとすると、扉が開いて数匹の Nabasu デーモンと、すっかり顔色が悪くなり、ぼろぼろの服に折り取ったいすの脚で武装したアキロスのなれの果てが躍り出てきた。

「うふふふあーっはっははー」

もはや人語を話さないアキロスは、+3 椅子の脚で襲いかかってくる。

一方で、先に奥に進んでいた王様が別の扉を開けると、そこでは三匹の Vrock が破滅の踊りを踊っていた。さらに後ろの扉が開いて、Hezrou デーモンが姿を現す。

「やあ、俺、セポコ。Akrios が心配で奈落から帰ってきたよ」

そう Hezrou は言って、Blasphemy を唱える。

奥から聞こえる踊りの音楽のせいでうまく動けず、Nabasu デーモンの enervation 連打でエステルは呪文を削られる。爆弾ももうあまり本数が無い。王様も Blasphemy と Grapple からようやく逃げ出し、一度合流、狭い路地で戦線を構築する。

すると、奥の方で何かがどさどさと落ちる音と悲鳴が聞こえ、怪しげな笛の音も止んだ。こうなれば Nabasu デーモンは敵では無く、アキロス(AC9)も瞬殺される。自称 Sepoko は不利を悟ると、Akrios の死体を抱えて逃げていった。この後、Akrios が Material Plane で再び目撃されることは無かった。

奥に向かった PC 達が見たのは、大量の書類の山に押しつぶされて気絶したメデューサーバードの姿だった。

「これは、ヒルナリックの加護だろうか…」

そこにもともとあったとは思えない書類の山を見ながら、ハイダンヴユはつぶやいた。

Owlbear10 分クッキング

「この奥の泉に、Falbe へと通じるポータルが設定されている」

扉の前で、Wriggling Man の解説が聞こえた。開けて中にいたのは、超巨大でまるまると太った Owlbear。

げんなりしたエステルは言った。

「私にアイデアがあります」

彼女は懐から紫の矢を取り出すと、Owlbear にむけてヒョウと放った。突き刺さった矢は、怒り狂う Owlbear の体内に潜っていく。それを見届けると、エステルは言った。

「あの矢は、一定時間ごとに相手の体力を削っていく呪いの矢。あとは扉を閉めてしばらく待つだけ」

一行が扉を閉めて待つと、しばらくは中でどンドンと音がしていたものの、だんだんと音は弱くなっていき、10 分後に扉を開けたとき、中にいたのは瀕死の Owlbear はエステルがもう一本矢を放つと、どうと倒れたのだった。

泉の水は、強力な Conj のオーラを放っていた。ある種の回復の泉らしく、王宮一行は最後の戦いに備えて短い休息を取るのだった。

妖精の女王

泉に触れると、一行は空に飛ばされた。足下はあるようだが、眼下には大草原と丘陵、そして森が広がっている。見たことのある風景。どうやら、ここはテストラシアの上空のようだ。もちろん、幻影だろうが。

100ft ほど向こうに、とびきり美しいニンフが一人。緑色の肌に、木の葉でできた服。トゲの生え

た顔と、とても人間の美の感覚からは外れているとしか言えないが、それでも恐ろしいほど美しく見える。

脇には、鎧に身を固め剣を抜いた騎士と、大きな葉で女王を扇ぐ二人の侍女。全員が奇妙なほど無表情だ。

ニリッサが口を開いた。

「あなたたちはここで何をしていますのですか。私の部屋に入る許可を出した覚えはありません。即刻立ち去りなさい。それとも、私の剣を返してくれるとでも言うのですか？」

ヴュが「先生、お願いします」と言ったので、ヴェテンスカップが口を開いた。

「うちの王子様を返して下さい」

「このことかしら？」ニリッサが手を振ると、鳥かごに入れられた赤ん坊が姿を現す。

「この地は私の土地です。私の土地で生まれたものを私がどうしても自由です」

ニリッサの瞳はせわしなく動き、その言葉もヴュ達に向けられているのか、独り言なのかよく分からない。これは完全に狂っているようだ。

「話になりませんね」とヴェテンスカップが言うと、女王は控えている騎士、ウェレランの王の抜け殻に命じた。

「私の騎士様、この無礼者達をつまみ出して頂戴」「御意」

騎士に何かの心でも残っていれば、とハイダンヴュは威圧した。

「女の言うことをハイハイ聞くななんて情けない奴だ！」

しかし亡王はフツと笑って、「敬愛する女性のために戦うのは騎士の誉れなり」と棒読みし、バスタードソードを抜いて歩き始めた。

戦いは、当然ヴェテンスカップの行動からで、ヘイストが味方にかかる。次にエステルが究極呪文 Twin Form を使って二人に増える。攻撃力は増えないが、単純に HP が二倍になる相当のインチキ呪文だ。二人のエステルが、突進してくる。

次に動いたのは、女王の侍女達。彼女たちは、昔戦ったダンシングクイーンと同じ種族で、踊り続ける限り相手を無力化する化け物だ。ダブルエステルは、この踊りによって無力化される。

そして女王はタイムストップ。カスタマイズされたエルダーエアエレメンタルを 6 体呼び出す。さらに、あまった Standard で、誰かが行動したら Time Stop という Ready。これにより、スロットがある限り無限に Time Stop できるというわけだ。こうして、Wall of Thorns や触れると怒りで目の前が真っ赤になる魔法の霧を出し、Buff などもした。

他の PC 達はこの Wall of Thorns を抜き出すのにアクションを費やす。Deck of Many Things で呼び出したらパラディン:Andy はハイダンヴュのグレイブにプレスウェポン。サルビアは前王に一騎打ちを挑む。

前王デュールは能力値を最大限までブーストされた HFO。バスタードソードとヘヴィーシールドの二刀流で、サルビアにたたき出したダメージは 250 点ほど。が、サルビアの呪文バックラッシュで自分も 150 点ほどのダメージを喰らう。

ハイダンヴュはニリッサを殴ってみるが、50 Over でも外れ。戦慄が走る。あまつさえ、Deflection 呪文で、外れた攻撃はハイダンヴュを襲うのだ。

Nymph は Cha を Deflection Bonus と ST に載せられ、ニリッサは呪文とマジックアイテムで可能な限り Cha をブーストしているのだ。

Andy は Holy Avenger の範囲 Gr.Dispel でバフを剥こうとする。試みは失敗するが、Spell Turning を抜けてくるこの攻撃を脅威に思い、ニリッサはエアエレメンタルに一斉攻撃を命令。Flyby-Vital-strike × 6 で Andy をミンチに変える。Mass Smite Evil しようと思っていたヴェテンスカップ（とニリッサの AC を上げすぎた DM）にとって、これは誤算だった。

そんなエアエレメンタル達も、ヴェテンスカップの Waves of Ecstasy でほぼ全員 Staggerd に。一

方、ダリーはエステルの催眠を解くべく、ダンシングメイドを殴りに。ハマヌーはサルビアを回復。

ニリッサは大技を使おうと、Dimension Door で位置を変える。デュールと一緒に動き、踊りに見とれているエステルコピーを殴り倒す。しかし、50近いACのエステルは瞬殺とはいかない。

ハダインヴュもエステルを救い出そうと、ダンシングメイドに向かって駆け寄るが、

チラッ「ふ、ふともも」「...」

あえなくダンシングメイドの踊りに釘付けに。

ニリッサは大技 Tsunami を使おうとするが、冷静に考えると、ほぼ全員空中にいたので、津波は効かない。代わりに、相手を絶望させる呪文などで行動を阻害する。

そんな中、やっとエステルが動けるようになり、デュールに爆弾を投擲し始める。これで瀕死になったデュールだが、ニリッサは冷静に Heal で回復。デュールはエステルコピーを粉碎。

だが、エステルは即座にコピーを再作成。デュールの的にする。

しかしようやく、ダンシングメイドが倒れ、ハイダンヴュが正気に変える。王のグレイブはエアエレメンタル達を粉碎。デュールはエステルのコピーをもう一回粉碎するが、さらなるコピーが。そして、爆撃にはニリッサの Heal も間に合わず、ついにデュールが倒れる。

一人残ったニリシア。しかし、下手に攻撃すると当たらないばかりか Deflection での跳ね返りがある。そこで、Spell Turning を削って、Dispel Magic で Barkskin を消す。だが、ニリッサは Quicken Barkskin で再度バフ。そしてタイムストップから Spell Turning を張り直すのだった。

これ以上は Spell Turning を削るリソースが無い。相手の Sorcerer/Druid スペルの量には適わないと考え、無理矢理当てる作戦に移す。ヴェテンスカップの Insight Bonus があれば、ハイダンヴュの攻撃なら当たる。それでも、命中するのは初撃、ヘイスト分程度。なかなかダメージを与えることが出来ない。

そこで、サルビアは捨て身のアンチマジックフィールド。ニリッサは Immediate で自分の周りに Wall of Force の空間を貼ってこれを回避。が、ヴェテンスカップは Disintegrate でこれを粉碎、ニリッサはアンチマに捕らわれ、AC を一気に下げる。しかし、PC 達の攻撃に耐えたニリッサは懐から取り出した Rod of Negation でアンチマジックを粉碎する。が、サルビアはさらにスクロールからアンチマジック。そこで再び Immediate Wall of Force。今度は、Disintegrate も無い。しかし、ここから出て攻撃するためには、Time Stop を使ってアクションを稼ぐ必要があるのだった。ニリッサも 9th がついてくる。サルビアは再度接敵し、ニリッサはまた Wall of Force を張るはめに。

ここで、ダリーは妹夫婦が用意してくれた、便利袋を思い出す。もしかしたら、中に Disintegrate が入っているかも...。果たして、中には Disintegrate のスクロールが。

ヴェテンスカップはこれを受け取り、再度 Wall of Force を粉碎する。再びアンチマに捕らわれたニリッサをハイダンヴュとエステルが攻撃すると、ついにニリッサは悲鳴を上げて倒れるのだった。

同時に、当たりの風景が一変し、変哲の無い城の一室に戻る。だが、ニリッサの身体は再生を続けている。

「剣だ、Vopal の剣なら彼女を倒せる」

逃げたと言っていた Wriggling Man からアドバイスが入る。そこで、Salvia が持っていた剣をニリッサの身体に突き立てると、ニリッサの身体の再生が止まった。同時に、彼女のうつろな瞳に理性の光が戻る。

「ああ、これは、私の心...そう、私は、あの人にあなたに一目会いたくて、ここへ...」

すると、突如空中から黒い触手が躍り出て、黒い影のような化け物が姿を現した。前にチルドレンオブナイトが呼び出そうとしていた黒い触手、カウント・ラナルクに違いない。

ラナルクは何も言わずにニリッサの身体を抱きかかえると、また闇の中に消えていった。
王子を取り戻したハイダンヴュは「王子は取り戻したぞ！」と関の声を上げようとして、ヴェテンスカップに止められる。

「王子が行方不明になっているのは国家機密です！」

「そうだった。みんな、敵の親玉は倒したぞ！」

ニリッサが倒れ、敵の幽霊軍団も消滅したようだ。幽霊の4騎士もやってくる。

「我らの王の名誉を守ってくれてありがたい」

「君たちの国に幸あれ。そして、私たちの国のことも、忘れないでくれ」

「それから、この Graveknight はコントロールが切れるから適当に壊してくれ」

「...」

こうして、亡国の幽霊は成仏していった。

それから

テストラシアを襲う大きな脅威はその後無かった。Issia での戦争は Dragon Coral によって終結していたが、南北は分離していた。南 Brevoy は北よりもまずテストラシアを脅威とみなし、戦をしかける。これをテストラシアは次々と撃退、逆に Lake of Mists and Veil 以南の南 Brevoy を全て併合するのだった。Restov は、それより早く、ヴュを名誉ソードロードとして迎え、テストラシアの大都市として繁栄したという。

テストラシアの傭兵はゴラムの眠れる剣と呼ばれ、Worldwound をはじめ世界中の戦場で活躍し、恐れられた。

ハイダンヴュの子供は親ほどの能力は持ち合わせていなかったが、母親の血が Oracle の才覚を現す。両親は Desna 信徒として育てようとしたが、彼はむしろ Hamanu になつき、Battle Oracle としてゴラムに見初められることになった。

「悪い奴は征服してもよい」というポリシーを打ち出した彼は、積極的に南の無法地帯、River Lands に攻勢をかけ、盗賊会議を打ち破ってその多くを手にした。

ハイダンヴュ

テストラシアの王として立派に国を治めた。息子に国を譲り渡したハイダンヴュは、「挑戦してくる」との書き置きを残して、Starstone のテストに向かい、そして帰ることはなかった。

ヴェテンスカップ

ハイダンヴュ、そしてその息子に仕え、テストラシアを取り回した。リリーの死亡に際して、今後の Mass Dream Feast の Focus となる強力なアーティファクトを作り出し、代償としてその命を失った。

エステル

ハイダンヴュの死後、もう一人の息子、ヴォの子供を偽王として立て、テストラシアを乗っ取るとうとするも、ヴェテンスカップにイニシアチブで負け、命からがら逃げ去る。その後のテストラシアに帰ってくることは無かった。

ダリー

ハイダンヴュの死までは警備隊長としてテストラシアに仕えるが、息子の代になってからは、エラスティルの教えを守り、妹夫婦達家族と農耕生活を送った。

ハマヌー

王国の宗教の柱として死ぬまでテストラシアの大司教の地位を守った。死後、ゴラムの戦列に加わった。そこで、戦場での食料について研究を重ね、Gorum's eadiable ration の呪文を開発した。

サルヴィア

ハイダンヴュが死ぬまでメイドとして仕えた。しかし、自分の居場所は人の地には無いと思いい、妖精達の世界へと旅だった。

かつて Stolen Land と呼ばれたこの地は、今では Sleeping Land と呼ばれる。
人々は寝て、訓練し、そして、また寝る。